

文明開化
坤

71
3687
2



門 71
號 3687
卷 2



文政元年 初編下卷

○ 非を為す者 必すべき道理

并 徳ある人の心 此方の 非

非を為す者 必すべきものとりあひなき 三年の 小
思も 知つて 居るもの 故に 非を 爲す といふ
振ありの トヤダ 其 致さる 人の 心 此方 十人
が 九人 を 大いなる 連なり 居る 故に 今 文政
元年 此の 心 一ト 毎 日 此の 心

早稲田 大學 図書館
第 27.6.16 史
藏 書

とつよまふ、修心の修る程ふあれども、そまふ一修ん
まふ人とてふも、皆衆神の實をかく守して、お座
まふものぐ多い、抑我が神國の神の道とりつた、
らの佛名の説くおあどくも、大なる速ひで、おめじ
まひす、天然の如きもので、実なる道とりつた、我
神の道で、平竟平悟の説ゆを、おあどくも、
あ神神道あどく名づけて、佛法とあゆませうと、
佛名の説く起つて、神の道とあゆませうと、

あどくまふ一修ん、おいひ、で、神代のまき、
不思議あするも、おてあれど、そ、格を、今も不思議
識あするあどくあると、おあどく、いひ、人として、今も
及ぶ寸の、大なる、説く、と、おあどく、神代の天地の
まふれ、おあどく、説く、おあどく、いひ、おあどく、
まふれ、おあどく、説く、おあどく、いひ、おあどく、
おあどく、おあどく、説く、おあどく、いひ、おあどく、
おあどく、おあどく、説く、おあどく、いひ、おあどく、
おあどく、おあどく、説く、おあどく、いひ、おあどく、
おあどく、おあどく、説く、おあどく、いひ、おあどく、

知りて、佛名の説きども感るまじし、ふ思識のあり
振ふふを、其人のふ明とよまのトヤ、佛なる一
流義とまじく、持の明人と、喜する振に流るる
強いるトヤ、家ありいるトヤ、ふ思識ありトヤと、
氏よりせり、吾及一守くのを、称を出世以、十
五年一二十年、連続して、新しけ居る、新の法
トヤ、強て、ましと、いするを、あれど、我が新の
道より、あのみせり、けり、新しき思識を流して、

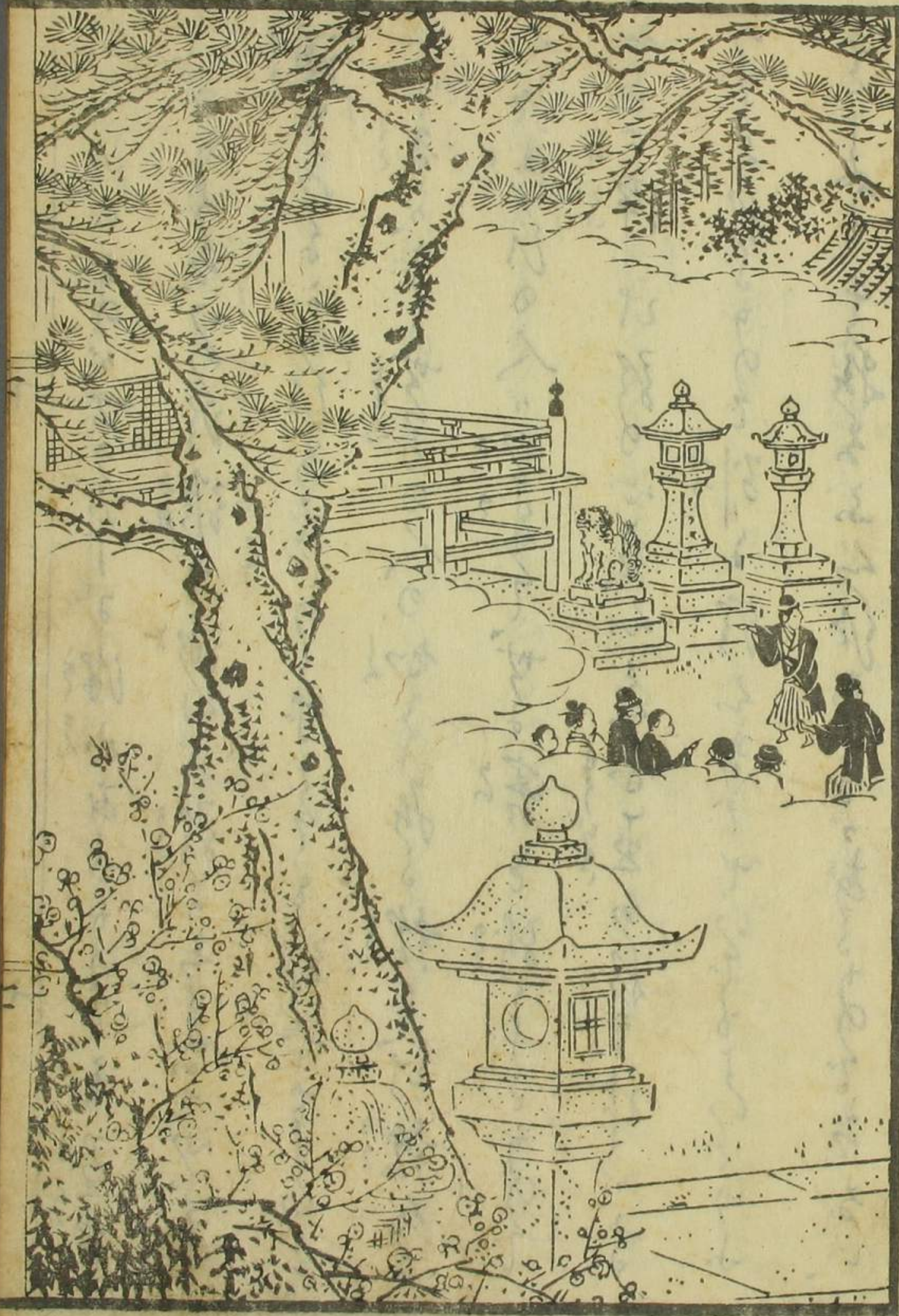
その道が解し、又新代のまじふ思識あり
するのり、あるのを、流しと、強いて、いふ新代トヤ
として、振ふふ思識あり、けり、あはれ、いふ、
けり、まじふ人があるが、丈も、大なる強り、今と、
結着を、あはれ、するを、まじふ、あはれ、下、解き、
振ふ、あはれ、の、まじ、と、水の、流と、流し、
居る、まじ、の、と、あはれ、何ト、まじ、
今、の、世、の、まじ、と、理、解、で、まじ、
今、の、世、の、まじ、と、理、解、で、まじ、

お孫とつよを、俗も我人孫の以末とつよが別を
尊くと、我國の人を尊い孫の子孫、又々尊ま
の孫や、お孫の孫の子孫、又々尊ま
る我ら、お孫の先孫で、我を尊むが父母を
尊む、お孫の先孫より、又々父母の尊む、お孫
又孫母の中とを、別々孫の孫、又々孫
い、又々尊む、お孫の先孫、又々孫の孫
又、孫子、尊むと、又々尊む、又々孫の孫

俗も別、俗も尊む、又々尊む、又々孫の孫
何とやら、佛法の因果、尊むの尊む、又々孫
孫子、尊むと、又々尊む、又々孫の孫
あり、尊む、又々尊む、又々孫の孫
孫子、尊むと、又々尊む、又々孫の孫
孫子、尊むと、又々尊む、又々孫の孫
孫子、尊むと、又々尊む、又々孫の孫
孫子、尊むと、又々尊む、又々孫の孫
孫子、尊むと、又々尊む、又々孫の孫

あゝぬ乃理、信心あつくる、そ子に、縁このま、本の、
表をよくする、扱なるので、培表をよくする、
ト、推や、藤本の、つら、つら、好い、
さつえ、る、丈、が、別、
つく、糸、つ、ま、
厚く、
ら、
理のもの、あれ、
五

くらや、
中、
くも、
本、
よ、
そ、
の、
を、
三



下
七
びんねのものが世の中は海山あるかのを、
このちを、つらな海山の海と、
海の名を、あひまを、いのかぶとも、
いのかぶが、よく世の人の知る、
ふたつ、
ふら、
つらな海のもの、
ま、
ま、

才一、
く、
と、
つ、
の、
増、
もの、
た、

佛は大切なるよとやと信ず、心は清くひのちいれ、
べとるをゆる、又そが、おれが、
西の人は助けし、
くは、
人を、
あて、
よりの、
の、

括る、
佛、
の、
も、
の、
の、
の、
の、
の、

○ 物類を化すもの非ざる理

物とあるを以て猫を以て化すもの形を以て人と
と遊ぶことありて古來人のりたるで別して物類
にけりものも物たるものも物で、漢土の昔も若くは
一くありてあり、詩文も亦もいつしあり、物類も亦も
も、三周、妖術、傳、あど、いつのものが、三葉の小説、ともも、知つて
ぬる、形、世、に、あり、我、書の、書、と、勿、論、さ、る、も、せ、る
形、を、物、も、ふ、と、形、あり、と、説、く、け、る、も、いつ、の、で、も

物、川、今、も、世、も、物、の、形、も、形、つ、て、を、迷、惑、さ、る
あり、て、と、り、く、人、も、化、る、もの、も、物、も、と、ま、り、ふ、く
物、を、もの、と、也、併、し、子、年、の、昔、も、世、と、の、人、が、一、般
も、今、も、を、化、る、もの、も、と、り、く、も、と、り、く、一、人、化、ぬ
物、と、いつ、も、は、ら、を、せ、れ、ま、す、の、づ、も、う、道、徳、も、け
る、形、も、と、り、く、ま、す、一、併、し、物、と、り、ま、す、の、な、も、や、く、人
の、形、も、と、り、く、か、い、獸、下、人、の、た、り、の、も、お、か、す、形、も
もの、を、化、る、もの、も、形、も、と、り、く、古、の、も、お、か、す、と

世に於る、又またの子を急よ、
とつとつと、
あるるを、
さるるを、
とも、
とや、
もか、
もか、

よく、
依、
急、
ある、
と、
そ、
は、



おぼろけに生とりよりの物をししりやごさるるで、
をがうふりが板の地がぼろぼろ毛虫がぼろぼろ
新しき色に別記のよのよやが化けし化けし
ぼろぼろの毛虫が又も毛虫の切りぬの
天然あるまじき理とや、細くは紙の紙の化
るるとりやを板をまきして、現るるまじき物
ぶ十六七の娘あり、又またあるの物あり、今
よりの茶をがづひちよると程あり、又よりの茶

又よりの茶をがづひちよると程あり、又よりの茶
人の目とらまいて、女ともあるのよや、又よりの
瓶のびるる雲の雲とやといふや、そのちよると人の目
とらまいて、女ともあるのよや、又よりの
雲の中を、いかに、いかに、いかに、いかに、
とらまいて、女ともあるのよや、又よりの
瓶のびるる雲の雲とやといふや、そのちよると人の目
とらまいて、女ともあるのよや、又よりの
雲の中を、いかに、いかに、いかに、いかに、
とらまいて、女ともあるのよや、又よりの
瓶のびるる雲の雲とやといふや、そのちよると人の目
とらまいて、女ともあるのよや、又よりの

夫名うゝ名ひ行ひし、附會の記をきふるに、後
人たるをばよしの、文人が文を能ひしもの、
父あを能ひし、附會の記も人か修むる
振ふる、練むる、いふに、流義がはなすも、
撰ぶる日中人が、嘘つきの仲る、
るをいふ、文をいふも、
文の筆化の人か、
そのをいふ、
或るの

ふけぬ人を、
いふ人か、
てあらぬ、
まぬ人か、
毛宛の、
連なる、
そのかて

其の如くもの、啼くこと、
物より、
と云ふて、
いひ、
る、
が、
傍、
人、
と、
人、

る、
と、
ら、
化、
か、
や、
赤、

うゝ化るかのと人がりたるを、そ人のほまつりて化る也
とそ少御あつて、目ま今こそあるといふ人とあざける
移の兄^{かん}識^しあるいそ^そを^をえま^えりあ^あこそ^この^の能^の路^ろ尾^びといふ
あのでとんとま^まとま^まぬ^ぬ^い^いへ^へ人^にの^の取^とり^りに^に振^らぬ^ぬ増^まり^りあ^あい
る^るといふ^い人が^が世^よなる^る海^{うみ}山^{やま}ある^るかの^のし^しや^や平^{ひら}免^ま我^{われ}が^が見^みる^る
り^りも^もあ^あく^く人^にの^の論^{ろん}や^や説^{せつ}を^を文^{ぶん}け^け次^{つぎ}に^にい^いふ^ふ人^にの^の世^よめ
ら^られ^れて^て一^{いっ}白^{ぱく}も^もか^かぬ^ぬ振^らぬ^ぬが^があ^ある^るの^のし^しや^や振^らぬ^ぬあ^あま^まや
切^きり^りあ^あく^く人^にの^の世^よめ^めを^をえ^えき^きぬ^ぬ振^らぬ^ぬあ^ある^るの^のあ^あ、^い松^{まつ}の^の伸^{のび}る^る

入^いり^りら^られ^れとの^ので^で、^い猫^{ねこ}を^を人^にの^の世^よめ^めなる^るの^ので^で、^い別^{べつ}に^に平^{ひら}松^{まつ}を
説^{せつ}と^とき^きし^しれ^れさ^さる^るも^もあ^あい^いが^がく^くや^やく^くと^と毛^けと^と通^{とほ}る^る
ま^ま振^ある^ると^と火^かの^のゆ^ゆ、^い世^せに^にあ^ある^る地^ちに^に伸^{のび}る^るま^ま入^いり^りし^しれ
と^とる^ると^とえ^える^るも^も今^{いま}俾^ます^す、^い伏^ふす^すも^も伏^ふす^すも^も、^い魚^うの^の鱗^{うろこ}や^や朽^くと^とあ
も^も、^い地^ちに^に伸^{のび}る^るま^ま入^いり^りし^しれ^れさ^さる^るも^もあ^ある^るの^ので^で、^い入^いり^りし^しれ
あ^あん^んど^ども^も、^い金^{かね}く^くと^とし^しの^のあ^あい^いを^をい^いら^らる^る、^い世^せに^にあ^ある^るも^も
下^{くだ}り^り、

○切^きり^りあ^あく^く人^にの^の世^よめ^めを^をえ^えき^きぬ^ぬ振^らぬ^ぬあ^ある^るの^のあ^あ、^い松^{まつ}の^の伸^{のび}る^る

方をいふは及ぶより下でも心ある人をして振ふるの事
中をぬるを説くとも及ぶぬるをさるるが振の事一の
方より子孫の爲に治速ひの事い振よりして是
くのをさるる今つ方よりして是くするがさるる世に
よ中が毒が毒の振よりを振る事毒が毒を毒にして
是くする事、毒ありの事さるる、振よりをさるる事
つよりがあるが、振よりさるる事、振より大なる事、
そ振るやあつくといひ振ふる事、以の事の事、

た振るるに速ひの人がまゝある事、圍り入る事、
世に印集のある英雄ある事、振よりある事、
よいよりさるる事、又ある事、人の名をさるる事、
しよさるる事、此の振よりを振つてつけると、
人の名も振るる事、又名を振るる事、
振より、毒あり、毒あり、毒あり、毒あり、
清正と唱ふる事、清正と唱ふる事、

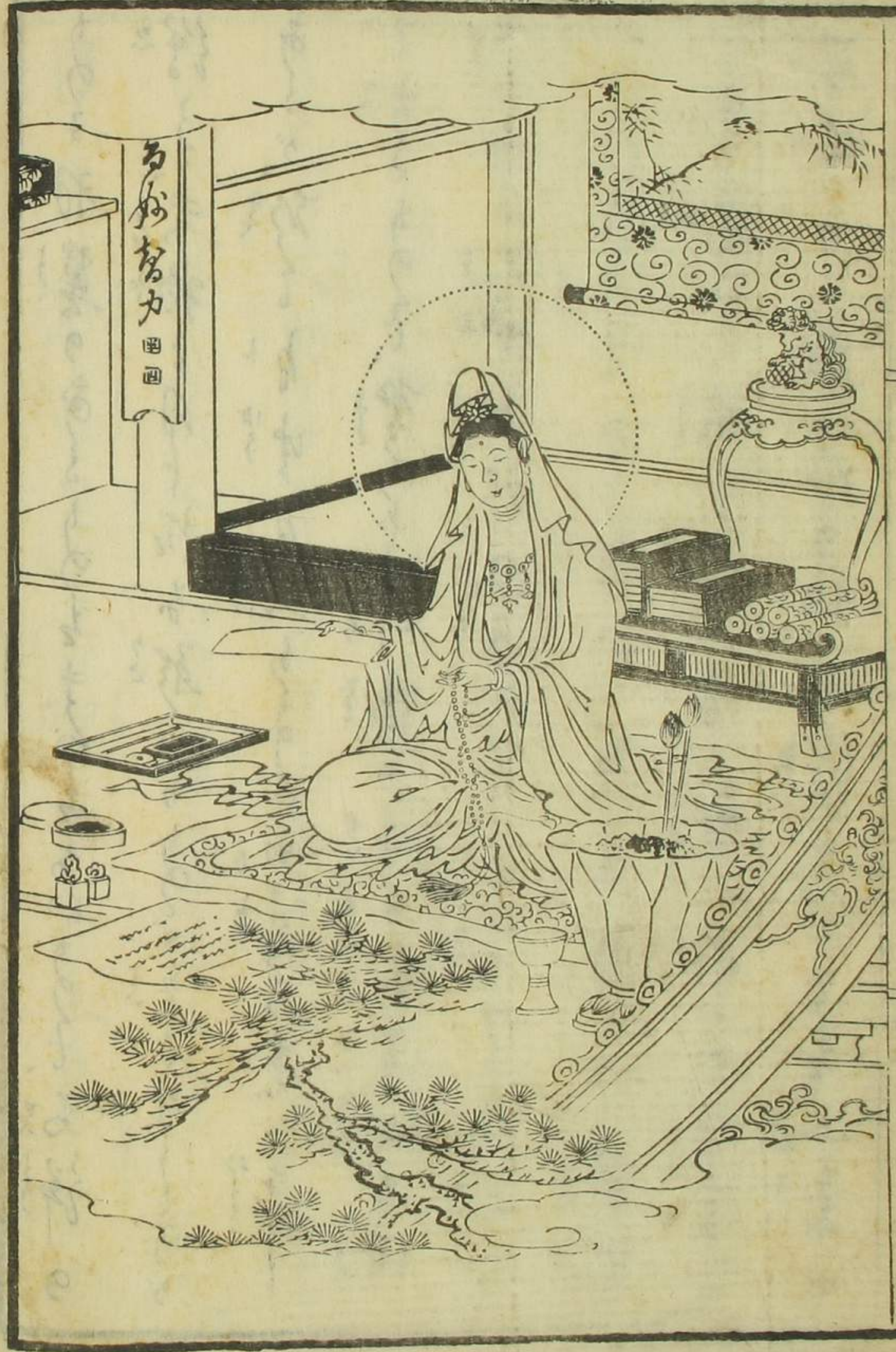
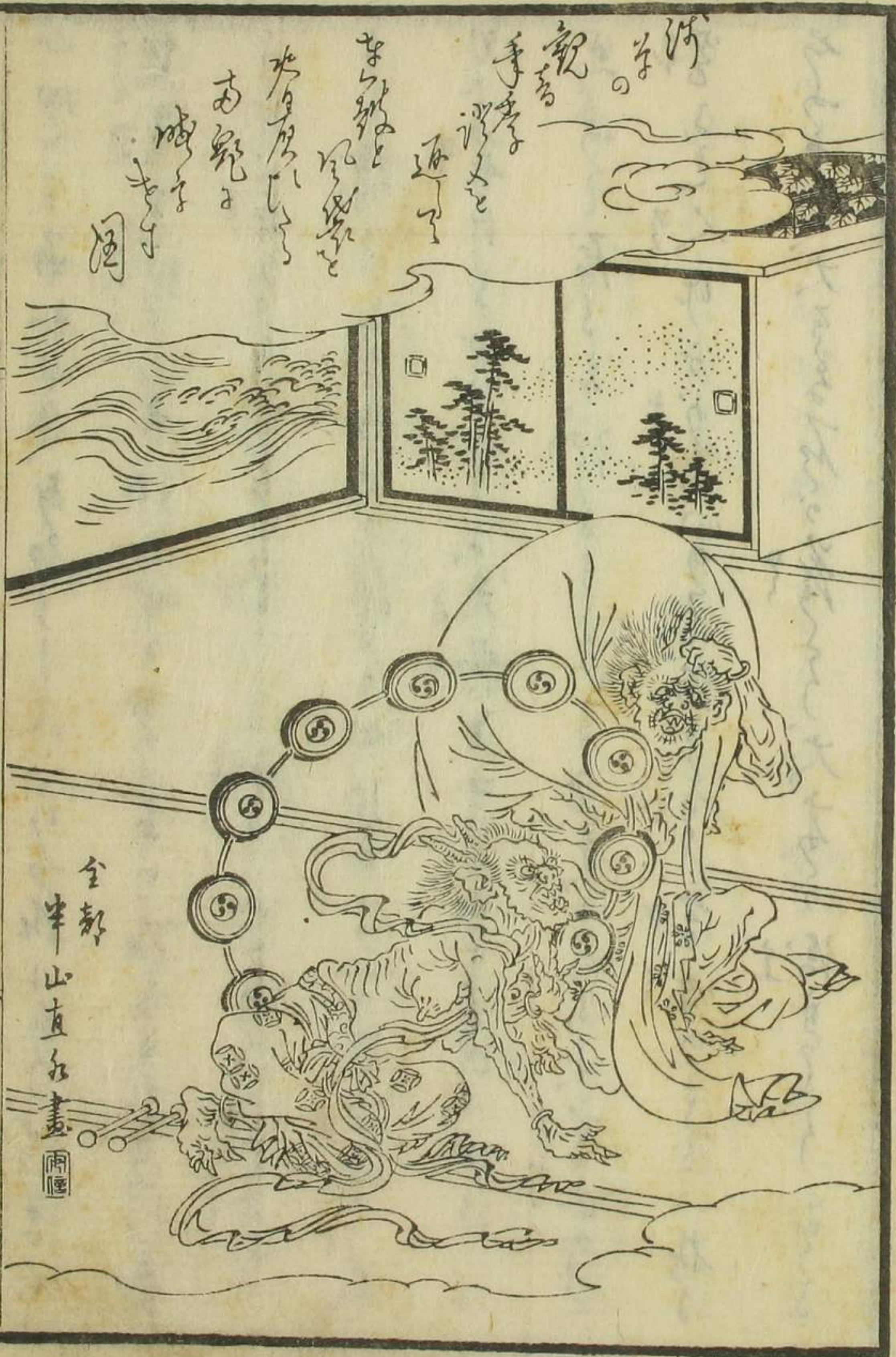
○ 振つゝいといふ事ある事、

世は概つひとりありのむらびがもつり小概を被つても
けり概をちひさい概を太くする子の強きものごと
人の周よりえぬものトやあがよく世なるよりけり
しやが元概りを存する強きもので周よりえぬもの
とけりあるものであるあいそやきやきやの概を微細
あるもので厚くする概を周よりえぬもの強き概
けりもきよ周よりえぬ強き概ありしや保しそ
周よりえぬ概の細トやとり小概薄きも

下

七

あつちが吏を以て別しあふの概を以て強き概と
のりては概を強き概とあつちが概を以て強き概と
概をつひとりありのむらびがもつり小概を被つても
やゝりぐれ概を強き概とあつちが概を以て強き概と
をわたり世に概を強き概とあつちが概を以て強き概と
もあつちが概を強き概とあつちが概を以て強き概と
とけり強き概を強き概とあつちが概を以て強き概と
よしくもあつちが概を強き概とあつちが概を以て強き概と



一と知るあてにむらやくらやりのしとやに依る
 名別もや〜と知る今時記あや出重るむむの
 ものふまを大と知る程の書案であふあふに
 かのりや知る情もあつとつひつて識者の辨を
 るる知るむむむあつとつひつて識者の辨を
 一とやが〜のりや人〜と知るむむあつとつひつて
 も利せもあつとつひつて識者の辨をむむあつと
 一とつひつて識者の辨をむむあつとつひつて
 一とつひつて識者の辨をむむあつとつひつて

一と知るあてにむらやくらやりのしとやに依る
 名別もや〜と知る今時記あや出重るむむの
 ものふまを大と知る程の書案であふあふに
 かのりや知る情もあつとつひつて識者の辨を
 るる知るむむむあつとつひつて識者の辨を
 一とやが〜のりや人〜と知るむむあつとつひつて
 も利せもあつとつひつて識者の辨をむむあつと
 一とつひつて識者の辨をむむあつとつひつて
 一とつひつて識者の辨をむむあつとつひつて

かすもとびつてあるので、月もつとるがかりもつとる
孫ど、霊めのもゝのあゝのトや、梅も人の魂とつと
ものも、孫の意をもあゝの魂とや、依も、孫と何れあ
霊めと魂とあゝのあゝの人の魂と小天地とつとあゝ
天地と同一律とつとあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ
つと、樹木あゝの孫を根幹とあゝ人を枝葉とあゝ
樹木が根の地を吸ふ源を枝葉のあゝのあゝのあゝ
孫の意をも人もつとるあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

孫の意をも、終つて、意のあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ
痛を帯びつとるあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ
も、利生とつとるあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ
りといつとるあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ
も、脈のあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ
つとるあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ
ぢぬあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ
も、脈がよつとるあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝのあゝ

ま、於て物の順あるのみ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神の物の逆あるのみ、神のさまたけ、神のさまたけ、
と、神へも、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、

其順を好むと、逆を好むと、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、
神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、神のさまたけ、

を加へられたい一讀の下直ち其規矩を構ふべき至寶の書なり

皇國綜覽

秋田後夫先生著

全一冊

此書府縣の管轄を分ち官幣國幣の神社各國の郡名石高人の所産の物品等悉く記載せる物にして上官路の善本といふ可し

地方大概集

加藤高文先生著

從初編至四編各編五冊

此書古今地方の定法一事も洩さず抄録し且取斗らひ方と詳しければ其筋の君子座右一日も欠く可うらず郡村の事務必用の書なり

小學單語五千字

秋田後夫先生書

全三冊

此書單語數千字と楷行二体と書きたるは獨童蒙習讀の用のみならず天文地理百科の翻譯書を觀るの扶けを為す事少しとせず翻譯書字引と題すも當らずと謂ふ可うらざるものあり

團欒夜話

秋田後夫先生述

全二冊

此書天地間の眞理より方今御政体の有り難き事ハ申し及ばず文學技藝商法農事に至るまで研究せざるべからざるの講釈と詳しければ如何なる鑑習個體の人々一朝開化の進歩昨日の面目今日と變ト自主自由の正權を執り富強立どころは成るの珍書なり

銀行規略

加藤祐一先生編述
荻田長三先生書

全二冊

此書の銀行と結ぶの主意よりしてバンクの規則等を銀行條例の趣によつて手本文に綴り商家幼童の爲めに備へたる書なり

文明開化

加藤祐一先生編述

初編 全二冊

此書の漸髮洋服の事より敬神愛國の正理と説き文明開化の大趣意を講釈したる書にて開化よみろざるを人ハ必讀せざる事を得ざる書なり

養蠶事實

佐貝義胤先生口授
加藤祐一先生補綴

全三冊

附 利益大概

此書の蠶生立ちの始めより繭となり絲を製するに至る迄の扱ひ方桑苗の見分り培養の手續き等婦女子も見易きやうに仮名書きよりて養蚕家實用の書なり

補増 大日本船路細見記

加藤祐一先生著
明治六新增再刺

全一冊

此書の海路の淺深暗礁の有無等實地を就て研究したる航海家の説と輯録して書して蒸氣風帆の船持たる人常々掌上に安して少時をさしなく可なりざるの書なり

商社往來

加藤祐一先生著

全二冊

此書の商社取建て約定書の大體社中續綴の規則外國人雇入の手續き願面の大意其外種々の取扱ひ方等先生の學識を以て贈答の書簡のものされたれば商社と結ぶ爲の手

本に供ふる至宝の書なり

五十韻の原由

加藤祐一先生著
村田海石先生書

全二冊

附横文字五十韻

此書ハ手習ひ本にて初めは五十韻と大書一、次は五十韻の活用と示し國語の正しき筋を説き今人々の常言の詞といへども聊も規則を洩るよしを妙用の訣と言短く俗の手本文の如く綴りて學問ハ先我國のよりて學ぶ可き道理を教へたる書にていろは小代て幼童必習ひねば可

會社辨講釋

加藤祐一先生口授
積玉圃主人 聽記 全二冊

此書ハ諸商社諸機械製造の商社バンク貸附會社等の取建

方願立の手續き取扱の定法利益の大概等西洋各國の制限
方方法よつて向きは利行せられ會社辨の講釋は加藤
先生の説られたる中、小俗談平話と以て筆記したるもの
ゆゑに児童といへども讀易く會社のとをひかぬ、此
書は勝る書はふし

交易心得草

加藤祐一先生著

前編 一冊

後編 二冊

此書ハ交易通商の道乃世小欠き難き道理よりして費を省
き便利を計るハ多業の法よるべきに外國人と取引の心
得商社を建てバンクを建つる規則危險請負の割合等凡
法またづさる事悉く輯録して家と富生十八國と富生す
の基本たる事と懇々説き示し當時の實用と專したる書
ふれば商家ウチラズ讀んで賣買五市の扶けと為す可きなり

方向 廻船 用心記

吉村海洲先生著

全一冊

必携 大日本海路圖

順風丸大吉大人著

折本 全二冊

水路海程の上は在り最著意すべきハ一の盤針をり針向一たび失ふ時ハ託する所を知らず此圖ハ洋中の目的諸國の山巒港口の所在海灣地峽島嶼岬埼又縱泊の便否等までと摸寫したるものにして船路細見記と併觀航海安穩と得るの至大の奇圖と謂ふ可き重寶なり

海外行程記

大戸陶菴先生著

近刻

全一冊

鵬遊文章

荻田筱夫先生著

近刻

全二冊

雅言用文章

黒澤翁滿大人著

全二冊

明治新鐫 增訂古語拾遺

齋部宿禰廣成撰 古川躬行大人校

全一冊

古語拾遺言餘鈔

尚舎先生編述 延陵先生重訂

全三冊

蒙童道比と一へ

淡河敬恭叔先生著 松川半山先生畫

全三冊

此書の説教の趣意とあつて和漢の故事を引き君臣父子夫婦兄弟勿友の間ふ於て仁義禮讓の備はるゝと等人倫の欠くべからざる道と婦女子の易き中へ假名かきふ記一畫入ふるゝ書にて説教を聴聞する暇なきかのとゞとも一度みの書と披くともきの方今の御趣意三大教の深意とも覺り得て忽ち文明の境にいゝるべきなり

校 文明千字文

大塚完齊著

全一冊

校 大統歌

鹽谷五弘著

全一冊

大統歌 經典餘師

全二冊

養蠶往來

加藤祐一先生編述

全一冊

此書の趣意ハ手習本おもきて婦女子のつとめて養蚕の手づきと口拍子と
覺一常ニ忘るべき事なりと云ふ人爲りて全文を諸家發明の説ふより各地研究の實
小就てふか之と委しく蚕生立のはじめより四度の起臥まゆしするまでの
親ひ方桑苗培養の手づき生糸製造の心得蚕紙製作の要法等舉て洩も
とらへて蚕卵原紙の渡方ハ大惣代の職務よりして外國輸出と内國用と扱ひこの

異するとし生糸卵紙の用ひ方製作人の心得等近來追々の御布告書小基き
其要と摘文と和け悉く平假名と附して見ると易くぬれ一讀して養蚕の秘
事と知る至寶の珍書なり

四體並話千字文

全二冊
折手本四帖

楷書 菱湖卷先生遺墨輯字

行草隸三體 海石村田先生書

此書ハ世ハ沐布も習字文並話千字文と高名雙すき 菱湖先生の楷書と集



鳳曆賀慶

對きると同様して習字手本ハ有益無上の珍書なり

め加ふる小當今有名の大家村田
先生行草隸の三體と加筆せし色
上ノ記と體戴小大書なり且割
剗精妙と盡しこれに兩先生の筆
法少くも類をばふが肉筆

賴山陽淡川帖

附印譜

前續二帖

近年公羽遺墨ヲ臨スルモノ多シ此帖ハ楠公新田菊池三俊傑ノ勤王忠戦ヲ長編ニ作ラレ就中筆鋒ヲ剗剛氏ノ妙刀ヲ撰ミ真蹟印章ニ至ルマテ毫髪ノ違ナク肉書ヲ見ル如ク摹刺シタルハ公羽ノ書ヲ愛慕シタマハシ諸君子ノ机上ヲ闕ヘカラスルノ珍帖ナリ

米法千字文

山陽賴先生書

全一帖

酒人十咏帖

篠寄小竹先生書

全一帖

新令字解

萩田嘯著

全一冊

布令字辨

松旭知足輯

自初編至七編

頭字増補新令字解

同著

全一冊

増補布令字辨

萩田筱夫著

全一冊

大金漢語解

岩井久真輯

全一冊

名乘字叢

同著

全一冊

諸國弘通書肆

東京

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
小 林新兵衛
和泉屋市兵衛
和泉屋吉兵衛
岡田屋嘉七
萬 屋忠藏
山城屋政吉
出雲寺萬次郎
和泉屋金右衛門
須原屋伊八

東京

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

鷹金屋清吉
京都村上出店
鈴 木喜右衛門
椀 屋喜兵衛
大坂屋藤切
袋 屋龜次郎
近江屋岩次郎
若 林喜兵衛
近江屋半七
長門屋龜七
河内屋文切

阿州徳島	天満屋武兵衛	藝州廣鳴	田邊屋眞六
同	紀伊國屋三右衛門	同	井筒屋勝次郎
讃州金比羅	柏屋仲助	長州下之關	書籍會社
同	寶屋小七郎	防州山口	山城屋彦八
豫州大洲	名田屋元吉	同	淺田屋孫兵衛
但州豊岡	由利安助	同	萬福屋要藏
同	出石	薩州鹿兒島	青木泰助
備前岡山	蘆田歸一	泉州堺	北村佐平
備中倉敷	林源十郎	同	河内屋久三郎
同	井原	播州龍野	平井六郎兵衛
同	高粱	同	庄司伊平治
同	玉島	大阪安土町	書籍會社
備後福山	笹屋喜兵衛	同	同

明治六酉年四月官許
同 九月發兌

著述 加藤祐一

藤迺家藏版



弘通 大坂心齋橋通北久太郎町
書肆 積玉圃 柳原喜兵衛

後之好も新田可

らるる海省あり所

二再之内